
月夜の夜にきみが僕に話したこと

海田 陽介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月夜の夜にきみが僕に話したこと

【著者名】

N2669D

【作者名】

海田 陽介

【あらすじ】

フリーターをしながらプロのミュージシャンを目指している海上弘樹のある日常を綴った話です。

第一話

待ち合わせ場所のサークルアイスクリーム前のベンチに腰かけた海上弘樹は、かじかんできた両手に息を吹きかけた。

寒い。十一月も半ばを過ぎ、いよいよ本格的な冬がやってきた気がする。

五分程もすると、中平勝生と東海林良美のふたりが並んで歩いてきた。何でも来る途中でばったり一緒になつたらしい。

中平勝生と東海林良美のふたりとは、一年程前でアルバイトをしていた喫茶店で知り合つて仲良くなつた。少し遅れて山本ゆかりと松田祥子のふたりもやつてくる。彼女たちもやはり昔やつていた喫茶店のアルバイト先で知り合つて親しくなつた。

それぞれ年齢は異なるが、しかし、年齢の差なんてほとんど気にならないほど、このメンバーと一緒にいると、海上はリラックスすることができた。ちなみに、このメンバーのなかで一番の年長者は海上だ。

今日は定例の飲み会がある日だった。

アルバイトを辞めてからも、だいたい月に一度くらいこうやって集まってみんなで飲んでいる。海上は今まで様々なアルバイトをしてきたが、アルバイトを辞めてからも、今のように長く関係が続いたのは、これがはじめての経験だった。もしかすると、このメンバーとは一生の付き合いになつたりするのかもしれないな、と、海上は考えたりする。

サーティワンアイスクリームのベンチ前であまり意味のない雑談を交わしたあと、海上たちは予約を入れておいた居酒屋へと向かった。

居酒屋での時間は穏やかに過ぎていった。みんな他愛もない話や、バカ話をし、それなりに盛り上がっているようだった。でも、今日の海上は気分が沈みがちで、上手くみんなの会話のなかに入つていくことができなかつた。無理にテンションをあげても、途中ですぐ疲れてしまつ。

諦めた海上は楽しそうに話しているみんなを傍観しながら、ひとりで黙つてソフトドリンクを飲んでいた。すると、黙つている海上を見て、退屈していくと勘違ひしたのか、中平が話しかけてきた。

「ウナッチは最近どうよ？」

と、あまり食べ物に手をつけない海上に、中平は鳥のから揚げを進めながら話を振つてくれる。中平は海上の一ひとつ下で、このメンバーのかなでは一番馬が合つ。

「どうつて？」

と、海上は中平に勧められた鳥のから揚げを箸で口のなかに入れながら質問の趣向を尋ねた。

「どうつて色々あるつしょ」

と、中平は酒を飲んでテンションがあがっているのか、変に明るい調子で尋ねてきた。

「たとえば、うーん、そうだね、タクシーをやめてからどうだとか

etc

海上は最近になつてそれまで続けていたタクシーというバンドを辞めた。

海上の将来の目標は、プロのヨーロッパのヨーロッパシードだ。タクシードというバンドを辞めたのは、べつにプロのヨーロッパのヨーロッパになることを諦めたからではない。単純に方向性の違いが確定的になつたからだ。他のバンドメンバーと自分の意見が頻繁に食い違うようになった。このまま無理にこのバンドでやつてこくよつは、今のバンドを辞めてひとりで活動していった方が良いのではないかと思つてなつた。だから、海上はバンドを辞めた。

「うーん。どうだうね
と、海上は中平の間に苦笑するよつて笑つてから、
「まだはじめたばかりだからね」
「でも、楽しいよ。バンド辞めて正解だつたと思つ。少なくとも今は自分の好きなように音楽できるからね」

やう言つた海上の言葉は、半分本當で半分嘘だつた。ときどきバンドを辞めたりせず、あのまま活動を続けておけば良かつたかな、と、思つたりする「ことがなくもない」。

バンドメンバーに、その演奏が違うとか、甘えているとか、言いたい放題言われてたまに頭にくることもあつたが、しかし、バンドを組んで活動していくメリットは、確かにあつたな、と、海上は今になつてふと思つたりする。

なにより、ひとりで活動するよつてなつた今では、演奏をしてくれるひどがないので、以前のようにライブを行えないのが、辛い。みんなに自分の音楽を聞いてもらつチャンスが少なくなつたよつて感じる。

それに、俺ももう一十七歳だ、と、海上は思つ。海上は音楽に専念したいので今はアルバイトで生活をしているが、そういうまでも

こんな状態は続けていられないだらうと焦る気持ちもあった。

海上は今この自分の迷いや焦りをいつそのこと中平にぶちまけてしまったような衝動に駆られた。しかし、そんなことを言えば、せつかくの飲み会の席が湿っぽくなってしまったと思ふ、結局口にだしては何も言わなかつた。

「逆に、ヒラッチはどうなの？」

と、海上はテーブルの上のもう残り少なくなつてしまつたウーロン茶を飲み干してしまつてから、中平に同じ質問をぶつけてみた。

中平は大学を卒業したあと、会社員をやつている。詳しく聞いたことがないのでも海上はよくわからなかつたが、何でも環境に携わる仕事だという話だつた。

「まあ、前よりはちょっと忙しくなつたかな」

と、中平は海上の間に少し考えてから答えた。

「やっぱり俺も今の会社に入つて一年目だからね。それなりに仕事を任せられるようになつて大変になつたことはなつたけど、でも、そのぶん仕事も面白くなつてきたのかな」

「へー。ちゃんと仕事してるんだ」

と、海上は感心して言つた。

「当たり前でしょ。ウナッチ、もしかして俺がいい加減に仕事していると黙つてた？」

中平が笑いながら海上の科由に抗議してくる。

「いや、べつにそういうわけじゃないけどさ」

と、海上は笑つて答えると、向かいの席に座つた東海林良美の顔に視線を向けて、

「東海林さんはどう？」

と、同じ質問を振つてみた。

「えっ、わたし？」

と、良美は酔つたせいでもおつとしていたのか、海上の質問にちょっと驚いたように答えると、

「うーん。どうだらう。大変なことは大変だけど、でも、最近はだいぶ慣れてきたかな」

と、笑顔で答えた。

彼女は海上の三つ年下で、保険会社で働いている。仕事の内容は主にクレームの処理のようで、働きはじめたばかり頃は電話をかけてきた客があまりにも理不尽なことを言いつらしく、よく辞めたいと漏らしていたが、最近はそんな苦情にも動じなくなってきたようだ、それなりに楽しんで仕事をしているようだつた。

「東海林は給料がいいもんな」

と、中平がからかうように言つた。

「プチセレブ。プチセレブ」

「べつにプチセレブじゃないよ」

と、良美は中平の言葉を笑つて否定した。

良美の働いている会社は大手の保険会社で、給料もいいようだつた。海上はケータイ販売のアルバイトを週五日やつているが、良美の現在得ている収入には遠く及ばない。もちろん、ボーナスだつてない。同じ時間働いてこうも収入が違うのかと唖然としてしまう。正社員か、と、海上は思う。俺もミュージシャンを目指すことなんて辞めて、どこか適当な会社に就職して働けばもうちょっと楽になるのだろうか。海上は自分の感情のなかに、ふとそんな弱い想いが生まれてしまつのをどうすることもできなかつた。

「山本さんと松田さんのふたりはどう?..」

と、海上が自分の思考のなかに沈み込んでいる側で、今度は良美が海上がしたのと同じ質問をふたりに振つた。

山本ゆかりと松田祥子のふたりは、今年短大を卒業したばかりで、今居るメンバーのなかでは一番年齢も若いし、社会に出てからの月日も浅い。

「朝早いし、先輩に気を使つたりすることが多くてそれなりに大変だけど」

山本ゆかりは幼稚園の先生をしている。以前話したときに、幼稚園は先輩後輩の上下関係がはつきりしていて大変だと彼女が漏らしていきことを海上はふと思い出した。

「でも、それなりに楽しんでやつてます」

と、彼女は笑顔で続けた。

「それにめっちゃ子供がかわいくて」

そう言つた彼女の顔はほんとうに子供がかわいくてたまらないといつた様子だつた。そんなゆかりの表情を見ているうちに、海上は、彼女が自分の知らないあいだに、着実に社会人として成長しているんだな、と、思つて眩しく感じた。

「松田さんは？」

と、中平がシーザーサラダを食べている松田祥子に振つた。松田祥子は食べることに集中していたらしく、中平の問に少しむせると、口元を手で隠しながら、

「はい。なんとか頑張りますよ」

と、答えた。松田祥子は丸いでショップ店員をしている。

「色々規則とかうるさくてときどき辞めたくなつたり、反抗したくなるときもあるけど、でも、なんとか続いてますね」

と、祥子は苦笑するように笑つて答えた。でも、どこかその彼女の表情は、自信に満ちているようにも海上には感じられた。

みんなアルバイトを辞めてから色々妥協したり、苦労したりしながらも、社会のなかになんとか自分の居場所を見つけて頑張つてい

るんだな、と、海上はみんなを遠くに感じた。みんな成長しているんだ、と、海上は思った。そして、自分がいつまでも同じ場所に留まり続けているように感じた。なんとかしなきや、と、海上は焦った。でも、具体的にどうすればいいのかわからなかつた。

ふいに、海上は意味もなく哀しくなつた。心の奥底から何かが手を伸ばしてきて、海上の気持ちを力任せにその心の奥底に引きずり降ろしていくのを感じた。

もう、俺はどこへもいけないのかもしれないな、と、海上はポツンと思った。そしてそう思つた海上の言葉を、目に見えない誰かが小さな声で「そうだよ」と、肯定する声を海上は聞いたように感じた。

居酒屋をあとすると、まだ飲み足りないとつぶつぶになつて、もう一軒海上たちは居酒屋を梯子した。そしてその一件目の居酒屋も閉店時間となり、店を出たのは、もう明け方の四時過ぎだった。

始発電車が動き出すまではまだ少し時間があつたので、それまでの時間を潰すために海上たちは近くの公園まで移動することにした。

公園近くのコンビニに寄り、みんなおののに飲み物やお菓子を購入する。海上は温かい缶コーヒーをひとつ買つた。

訪れた公園は、もう冬で寒さが厳しいといつに、大学生くらいの人間が何組かいた。何を話しているのかまではわからなかつたが、みんな大きな声でさわいだり、笑つたりして、楽しそうにしている

ようだつた。悩み事なんて何もないように思えた。海上は、そこで楽しそうに時間を過ごしていいる学生たちに過去の自分の姿を見たように思った。

海上も四、五年くらい前では悩みなんてなかつた。それはもちろんどうやつたらもつといい音楽を作れるだらうかといった悩みながらあつたが、今のように自分の将来のことを考えて思い煩つたりすることなんてまずなかつた。

自分の未来は希望に満ちているに違いないと無条件に信じることができた。

二十四歳くらいでインディーズデビューして、ファーストアルバムがじわじわと売れて、セカンドアルバムでメジャー・デビュー。しかし、それが現実はどうだらう、と、海上は過去の自分の幼さが恥ずかしくなる。二十七歳にならうとしている今、自分はメジャー・デビューディレクタ、インディーズデビューすらできていない。現実が厳しいことこのことなんてわかつていていたつもりだつたけれど。

冷たい風が吹きぬけていき、周囲の足元に散らばつた枯れ葉が乾いた音を立てて地面を転がつていった。海上は寒さで身体を丸めた。ふと、夜空に視線を向けると、空のだいぶ低い場所に月が見える。小さな、物静かな光を放つ月だった。

海上は適当に空いているベンチに腰を下ろすと、缶コーヒーのプリンスを開けて一口飲んだ。液体の甘さと温かさがじんわりと身体に広がっていく。

山本ゆかりが歩いてきて、海上のとなりに腰を下ろした。

「明日はバイトないんですか？」
「、ゆかりは口を開くと言つた。

海上はゆかりの間に、あることはあるが、でも昼からの仕事だし、ちょっと眠ることもできるので問題ない、と、答えた。

「逆に山本さんは仕事大丈夫なの？」

と、海上は自分のとなりでペットボトルのお茶を飲んでいるゆかりに同じ質問を返した。

「あつ、明日は休みだから大丈夫です」「と、ゆかりは小さく笑って答えた。

「へー。明日は幼稚園休みなんだ」

と、海上は少し意外に思つて頷いた。すると、ゆかりはちょっと可笑しそうに笑つて、

「明日は日曜日ですよ」

と、忠告するように言つた。

「そつか。今日って日曜日だつたんだ」

と、海上は答えて苦笑した。海上はアルバイトなので普段あまり今日が何曜日あるかということを意識することがない。

少しの沈黙があつて、その沈黙なかに、中平が何か言つて、良美と祥子のふたりが笑う声が聞こえた。

「今日は月がきれいですね」

と、しばらくしてからゆかりがふと思いついたように言つた。

「そうだね」

と、海上は頷いて言った。海上は改めて夜空の隅の方に引っかかつている月に注意を向けてみた。

「なんというか、寒くなってきたせいで空気が澄んでるのか、心なしか色んなものがきれい見える気がするよね」

と、海上は言つた。

「海上さんって案外ロマンチストですよね」

と、ゆかりは海上の科白に可笑しそうに微笑して言つた。

「うん。俺つて基本的に究極のロマンチストだからね」

と、海上は答えると、冗談めかして少し笑った。それに誘われる
ようにしてゆかりも少し笑つた。
弱い風が頬を撫でた。目の前の道を誰かが横切つていぐ。

「・・・そういうえば、海上さんって昔わたしがライブ行つたとき、
何か月がでてくる歌を歌つてませんでした？今日は月がきれいに見
えててとかそういうの」

「よく覚えてるね」

と、海上はゆかりの科白に笑つて答えた。その歌は「月の見える
夜にきみが僕に語つたこと」という題名の歌だつた。

「わたし、あの歌好きなんですよ」

と、ゆかりは微笑んで言つた。

「あのライブのとき、百円で売つてたCD、わたし今でもよく聞い
てますよ」

「へー」

海上は意外に思つてゆかりの横顔に視線を向けた。そのCDとい
うのは、三曲入りの、自主制作したものだ。

「あの歌つて、友達のことについて歌つた歌ですね？」

「そうだよ」

と、海上はゆかりの質問に頷いて言つた。

海上があるとき月を見ていると、ふいに海上は友達のことを思い
出した。そしてその友達のことを考えながらものの十分程で、海上
はその歌を作りあげてしまった。普段、曲作りにすごく時間のかか
つてしまふ海上としては珍しいことだった。

「あの歌、いいですよね」

と、ゆかりは言つた。声の感じからして、ゆかりが本気でそう思
つているということが伝わってきた。

「そうかな？」

と、海上は少し照れ臭くなつて笑つて答えた。

「うん。すこぐいいと思います。恋とか失恋の歌じゃなくて、純粋に友達のことを持つて、友達を大切していきたいっていう想いが伝わってきていいなって思います」

「ありがとう」

と、海上は笑つて礼を述べた。

「山本さんはいいひとだ」

「海上さんつて近いうちにまたライブやる予定とかないんですか？」

「うーん、今のところないかな」

と、海上は答えた。

「またライブやることがあつたらぜひ教えてくださいね」

と、ゆかりは微笑んで言つた。

「だいたい夜には仕事終わつてゐし、行けると思つんでぜひ声をかけてください。またあの唄の歌みたいないい歌作つてくださいね。楽しみにしてるんで」

海上はゆかりの言葉にどう答えたらいのかわらかなかつたので、曖昧に微笑しただけだつた。それに、自分にはこれから先新しい曲を作れるかどうか海上はいまひとつ自信がもてなかつた。

と、海上がそんなことを思つてみると、良美と祥子のふたりが急に慌てた声を出すのが聞こえた。どうしたのだろうと思い、海上が声の聞こえた方向に視線を向けてみると、どういうわけか、中平が大量の鼻血を出している。チョコレートでも食べ過ぎたのだろうか。やれやれと思いながら、海上は中平の介抱をしている良美と祥子のふたりを手伝うためにベンチから立ち上がつた。

第一話

その日、アルバイトを終えて店を出たのは、夜の九時過ぎだった。

今日は日曜日だといつこどもあつて店は忙しかつた。それに付けてイレギュラー的な問題がしばしば発生して、責任者である海上は休暇を取つている店長に確認の電話を入れたりと対応に追われて必要以上に消耗した。

今日はもうぐつたりと疲れ切つていてすぐにでも家に帰りたい気分だつたが、日曜日である今日はスタジオに練習の予約をいれつておいたのでいかなければならなかつた。キャンセルすることもできなくはないのだが、そうすると、キャンセル料を取られることになる。

スタジオに入ると、海上は早速練習に取り掛かつた。やはりスタジオだけあつて思い切り大きな音で演奏できるし、歌も歌えるのでいいなと感じる。

海上はこれまで自分が作つてきたオリジナル曲を一通り練習したあと、この前公園で山本ゆかりが言つていた言葉をふと思いつけて、新曲を作りに挑戦してみることにした。考えてみると、ここしばらく新しい曲なんてひとつも作つていない。

海上の場合、曲を作るときはいつも大抵即興でギターを弾きながら作つていく。でたらめに思いつくままにギターを弾いていると、たまにこれはと思うようなメロディーが浮かんでくることがある。海上の場合、その偶然浮かびあがつてきたメロディーを徐々に発展させていく、ひとつの曲を作るという感じだ。そしてメロディーが出来上がつてしまつてからあとで歌詞をつける。たまにそれが逆

になることもある。

海上はしばらくのあいだ新曲を作ろうとギターをかき鳴らしてみたが、結局、全ては徒労に終わってしまった。ギターの音は頭のなかを上滑りしていく。ギターを弾いているうちに、でたらめな音の羅列が少しずつ纏まつた形になっていくといふことがない。音が像を結んでいかない。

海上は諦めてギターを置いた。そして曲を作ることができないのであれば、せめて歌詞だけでも書こうと思つた。大学ノートを開き、ボールペンを持つ。

しかし、これもだめだった。一瞬、いい言葉が浮かんだと思つてそれをノートに書き写してみても、しばらくすると、それがなんだか安っぽい言葉のように思えてきてしまう。仮に何行か書き進めることができたとしても、そこから先の言葉が、ぶつん音が途切れてしまつたように、何も浮かんでこなくなってしまう。暗闇のなかを彷徨ついて、やつと出口を見つけた思い、ドアを開けて階段を下りていくと、途中でその階段がなくなつてしまつていたという感じだ。

海上は妙に暗い気持ちになつて広げていた大学ノートを閉じた。それから目を閉じる。スタジオのなかにいるので目を閉じてもそれほど目の前が真つ暗になることはないはずなのに、そのとき目を閉じた瞼の裏側には、奇妙に濃度の高い暗闇が広がっているように海上には感じられた。

練習を終えてアパートに戻ったのは、もう十一時近くだった。

西田直美は、2DKのアパートの、寝室として使用している部屋でもう眠っていた。

直美とは付き合って六年目になる。そして同棲するようになつてからは四年の歳月が流れている。

直美は海上よりもふたつ年上なので現在二十九歳だ。彼女は現在ロフトで派遣社員として働いている。

もう付き合つてから長いし、できることなら彼女と結婚したいと思うのだが、しかし、いかんせん、海上は明日どうなるかわからないうフリーターの身なので今はとても結婚することなどできない。彼女も来年は三十歳だし、早く結婚したいだらうなと思うと、海上は申し訳ない気持ちで一杯になる。彼女のためにも、あえて自分は直美と別れた方がいいのかもしれないと最近は考えたりすることもある。

海上は彼女を起こさないようになつと部屋を移動すると、もうひとつコビングとして使つてこる部屋に移動した。

とりあえずとつ感じで風呂に入る。風呂からあがると海上はテレビをつけた。

テレビでは夜のニュースがやつていた。ニュースでは相変わらず明るい話題よりも暗い話題の方が多い。どこかの遠い国では自爆テロが多発していて、今のところそれを防ぐ有効な手立ては見つかっていないようだ。日本では有名な国会議員が汚職で捕まり、どこかの小さな町では殺人事件が起つていた。特集として、ネット

カフュ難民と呼ばれる低所得者たちの悲惨な現状が報道されていた。

テレビを見てみると、もう少しにも希望なんてないような暗い気持ちになってしまった。海上はうそをついた気持ちになってしまったテレビを消した。

気分転換に音楽でも聴くついで、最近買ったばかりのCDをCDプレイヤーのなかに入れ、ヘッドホンで聴く。でも、その音楽を聞いていても少しも音楽に気持ちを集中することができないどころか、ただうるわしく感じるだけだった。

海上は音楽を聴くこともやめた。

何もやりたいと思いつくことがなくなってしまった。

部屋のなかは奇妙にしんとして静まり返っていて、息苦しく感じられるくらいだった。六畳一間の空間が、自分の方に向かってぎゅっと収縮していくような圧迫感に襲われる。

海上は諦めて消していたテレビをつけた。テレビでは夜のニュースが終わり、何かのバラエティ番組がはじまったところだった。テレビから賑やかな笑い声が聞こえてくる。

と、そのとき、海上の居る部屋のドアが唐突に開いた。見てみると、直美が眠そうな顔で立っている。

「じめん。起こしちゃった?」

海上は直美的顔を見て言った。すると、直美は眠そうな顔で首を振り、

「ちょっと喉が渇いちゃって」

と、ほんやりとした口調で答えた。

彼女はそのまま台所の方へ歩いていくと、冷蔵庫から麦茶を取り出して、コップに注ぎ、一息に飲み干した。寝室として使っている部屋から台所にいくためには海上の居る部屋を通りなければならぬ。

直美は麦茶を元通り冷蔵庫のなかに戻すと、また海上の居る部屋まで戻ってきて、海上のとなりあたりに腰を下ろした。そして焦点の定まらない視線をなんとなくテレビ画面に向けながら、

「今、帰ってきたの？」

と、尋ねてきた。

海上は彼女の間に短く頷いた。

「練習してたの？」

海上はそうだといつぱりに頷いた。

「最近調子はどう？」

「あんまりよくないね」

と、海上は答えた。

「そつか」

と、直美はどう言つたらいいのかわからない様子で曖昧に頷いた。沈黙があつて、少しのあいだ、テレビの音声が狭い部屋に溢れた。

「明日仕事は？」

と、今度は海上の方から訊ねてみた。

「九時から。だから明日は七時起き」

直美は海上の問にそう答えると、眠そうにあぐびをひとつした。

「起きていいの？」

と、海上がちょっと心配になつて言つと、

「大丈夫。今日帰ってきてからすぐ眠つたから」

と、直美は微笑して答えた。

「そつか」

と、海上はただ頷いた。

「来週ね」

と、何秒間か黙つていてから直美はふと思いついたよつと口を開いた。

「うん」

と、海上は相槌を打った。

「友達の結婚式があつて、だからちょっと行つてくるね。その日は友達の家に泊まることになると思うから」

海上は彼女の科白にわかつたと頷いた。そしてそれから海上は、

「なんかごめん」

と、短く謝つた。

「何が？」

と、海上の言葉に、直美は振り向いて少し可笑しそうに口角をあげる。

「いや、ほんとうだつたらや、直美も結婚とかしたいだろ?」なと思つてさ、「

海上がちょっと照れ臭くなつて濁すように答えると、直美は少し笑つて、

「もしかしてわたしが結婚式の話なんてしたから?」

と、からかうような口調で言つた。それから、彼女は急に真面目な表情に戻ると、

「そんなことだつたら気にしなくて大丈夫だよ」

と、優しい口調で言つた。

「わたしはべつに早く結婚することにこだわつてるわけじゃないし、直美は続けてそう言つと、微笑んで、

「そんなこと考へてる暇があつたら、頑張つていい音楽作つてよ。そして早くデビューしてよ」

と、言つた。

「そうだね」

と、海上は彼女の言葉に苦笑するように笑つて頷いた。直美の言葉は、単純に海上にはありがたく感じられた。

それから、海上は、直美が麦茶を飲むところを目にしたせいなのか、急に喉の渴きを覚えた。海上はそれまで座っていた床から立ち上がり、台所まで歩いていき、冷蔵庫から麦茶を取り出すると、それをグラスに注いで直美のときと同じように一息で飲み干した。

ふと台所の窓の外に目を向けると、そこには月が見えていた。それは上の箇所がほんの少し欠けた、淡い黄色の、優しい光を放つ月だった。

それから、いつも通り、なんとなく毎日は過ぎていった。アルバイトに行き、たまにスタジオで練習し、家に帰つてから本を読んだり、好きなCDを聴いたりする。特に幸せでも、不幸せでもない毎日。

ゆかりに言われてから海上は諦めずに新曲作りに取り組み続けたけれど、なかなか思うようにはかどらなかつた。このせき、もう自分は新しい曲なんて作ることができないんじやないか、と、だんだん絶望的な気持ちになつてくる。

海上の音楽に対する苛立ちはちよつとずつ海上自身の心のなかに蓄積されていき、やがて限界まで蓄積されたそれは行き場を失つて、海上の感情のなかで腐りはじめる。

そのとき、海上は信号待ちをしていた。でも、どういうわけか、いつまでも待つても信号は赤のままだつた。車の往来は激しく、信号を無視して渡つてしまふこともできない。

海上はだんだん苛立つてきた。特にどうしても早くに家に帰らなければならぬ用事があるわけでもないのだが、寒空のなか、無意味にこうして待たされるのは苦痛以外の何物でもなかつた。それに、今日レンタルショップでDVDを借りて帰ろうとして、以前借りていたDVDが未返却になっていることが判明し、結局その借りたかつたDVDを借りることができなかつたということも、いまの海上の苛立ちに拍車をかけていた。

DVDが未返却になっているのも、そのせいで借りたかったDVDを借りることができないのも、完全に自業自得なのだけれど、しかし、そつとわかっていても、海上は苛立ちを押さえることができなかつた。

こんなことくらいでイライラしているなんて馬鹿馬鹿しいし、無意味だと思つたけれど、海上は我慢できないほど怒りが込みあげてくるのを感じた。世の中のありとあらゆることが、自分のことをバカにして、コケにしているように感じられた。

曲作りが上手く進まないせいが、普段であればなんとも思わないことが、必要以上に腹立しく感じられてしまつ。

海上はムシャクシャしてきて、側にあつた電柱を思い切り足で蹴つ飛ばした。

すると、足に猛烈な痛みが走つた。

しかも、変な態勢で電柱を蹴つたりしたものだから、バランスを崩して、持つていた自転車ごと派手に転んでしまう。

泣きそうになつた。

側で海上のことを見ている人間がいなかつたのがせめてもの救いだつたが、海上は惨めで、情けない気持ちで一杯になつた。

俺はこんなところで一体何をしているのだろう、と、海上は思つた。もう二十七歳で、フリーーターで、未だにほんの小さな結果さえ出せずにつる。このさき生きていてもいいことなんて何もないんじゃないが、と海上は大袈裟に哀しくなつた。

心のなかの、鬱屈した感情がじりじゃまぜになつて眠つている、粘液質な液体で満たされた黒い沼から、何か絶望にも似た激しい感情が、黒い気泡となつて浮かびあがつてきて海上の意識のなかで弾けた。

もう、死んでしまつてもいいかな、と、ふに海上は投げやりな気持ちになつてしまつた。

まるで自分のまわりから音が消えていくように、心に力が入らなくなつた。何も考えられなくなつた。

ふと気がつくと、無意識のうちに、海上は足を踏み出していた。田の前の道に向かつて。

信号は赤のままで、六車線ある道路をたくさんの車がかなりのスピードで走り過ぎて行く。

しかし、海上は構わずに足を前へと運び続けた。

と、そのとき、近くで何かけたましい音が聞こえた。

なんだらつと思つと、それは車のクラクションだった。

気がつくと、海上はあともう少しで、車の往来の激しい道路のなかに完全に足を踏みこもうとしていた。海上の存在に気がついた車が、際どいところによけていく。

一体自分は何をしようとしていたのだろうと海上は思った。バカ

「じじ。

我に返った海上は慌ててもとの歩道まで小走りで戻った。

何気なく、となりの電柱を見てみると、田の前の横断歩道は押しボタン式になつてゐる。

やれやれ、と、海上は思つた。どうも疲れてゐるみたいだ。ため息をつくと、それはため息の形で口へ撞つた。

改めて押したボタンを押すと、信号は拍子抜けするほどぱわっと赤から青へ変わった。

「でもさ、ウナッチは恵まれてる方だと思つけどな」と、中平はもう残り少なくなつた紅茶を口元に運びながら言つた。

海上と中平はサンマルクカフェにふたりでいる。仕事が早く終わつたらしい中平が、海上に電話をかけてきて、暇だつたら一緒にお茶でもしないかと誘つてきたのだ。海上も特にその日は用事が何もない日だったのですぐに中平の誘いに応じた。

「だつて、俺なんて特に何もやりたいことなんてねえもん」と、中平は笑つて言つた。

サンマルクカフェでくだらないな雑談をしていくうちに、いつの間にか話題は、海上の音楽に関する話になつた。気がつくと、海上は、自分の悩みを適当に冗談で誤魔化しながら中平に話して聞かせていた。こんなふうにぐちぐち悩むくらいなら、いつそのこと、自分は最初から音楽なんてやつていなければよかつたのかな、と。

「俺には言わせれば、ウナッチは贅沢だと思つけどな」と、中平は言葉を続けて言つた。

「世の中には自分が何をやりたいのかわかんなくて、なんとなく働いているやつばかりなのに、そんななかでウナッチははつきりとした目標があるんだから、俺は恵まれると思つよ」

海上は中平の科白に曖昧に頷くと、コーヒー カップを口元に運んだ。しかし、それはいつの間にか空になつてしまつていた。海上はコーヒーカップをもとのソーサーの上に戻すと、胸ポケットからタバコの箱を取り出して、そこからタバコを一本取り出して口にくわ

えた。

「俺は今会社に就職して一年目だけど、正直、楽しいかつて訊かれたなら、べつに樂しくはねえもん。まあ、やつていくつひちよつとずつ慣れてくるし、責任ある仕事を任せたりして、やりがいを感じたりすることがなくもないけど、でも、ほんとうの意味で充実してるかつて言つたらそつじやないからね。」

やつぱり上から指示されて動いてるだけだし、色々と面倒くせえ規則とかあるしさ・・俺の場合、基本的にお金がないと生活していくいながら、働いているだけだからね。だから、そういう意味ではウナツチはうらやましいと思つよ。やりたことがあって。俺もなんかそういうのあつたらいいなって思うけど、なんもないからね」

海上は「なるほどね」と、中平の言葉に頷くと、くわえていたタバコにライターで火をつけた。深く煙を吸い込んで吐き出す。

確かに中平のような意見もあるのだろうな、と、海上は思った。でも、そのやりたいことによってかえつて足をひっぱられている人間はどうすればいいのだろうと海上は一方で思つたりする。

なかなか結果を出せず、かえつてそのやりたいことで追い詰められていつてしまつような人間は、むしろやりたいことなんて何もなく、適当なところで妥協して、適当に生きていける人間のほうが幸せなんじやないかと思えたりもする。

そんな海上の考えを見透かしたかのように、中平は言葉を続けて言った。

「そりゃあ、ウナッチみたいに、自分のやりたいことでなかなか結果出せないひとは辛いと思うよ。焦つたりするのもわかる。でも、基本的に、自分のやりたいことをやるっていうのは辛いものだからね。目標を持つて生きていこうっていうのは大変だよ。でも、そのことは覚悟のうえでウナッチは音楽をはじめたんでしょ？だったら、大変なのは当たり前だと思って頑張った方がいいと思うけどな。三十になつたつて、四十になつたつて、自分が納得できるまで」

「・・・そうだね」

と、海上は中平の言葉に少し眼差しを伏せて頷いた。それから、海上はまだほんの少しあく吸つていらないタバコの火を灰皿で押しつぶすよじにして消した。

「でも、もちろん、このまま音楽を続けていく、いかないは、ウナッチの自由だよ。正直、ウナッチが音楽を辞めたからって音楽がこの世界からなくなつてしまつわけじゃないし、誰も困らないよ。ほんとうにウナッチがいま辛いと思つてて、辞めたいって思うんだつたら、無理に続ける必要はないと思つ。・・・まあ、俺は頑張つて続けて欲しいけどね。俺、ウナッチの作る音楽結構好きだしさ」

海上はそういつた中平の言葉にどう答えたらいののかわからなくて黙つていた。中平の話すことにはいちい切れどもなことばかりだつた。

しかし、海上は中平にどれだけ理屈を述べられても、今、自分がどうしたいのか、どうしていくことが自分にとって正しいと思える選択肢なのか、決められずにいた。

海上が黙つて自分の思考のなかに沈んでいると、中平はちょっと水を取つてくると言つてそれまで座つていた席から立ち上がつた。

海上が斎藤英樹とばったり再会したのは、海上が休日で街を特に用事もなく歩いていたときだった。

海上がロフトで珍しいデザインの椅子に見とれないと、背後から声をかけられた。海上がちょっと驚いて振り向くと、そこには斎藤英樹が立っていた。斎藤英樹は海上が昔ピザヤでアルバイトをしていたときに知り合った人間だ。

斎藤はサラリーマン風のスーツ姿で、髪型をきれいに七二三わけにしていた。

「久しぶりじゃん」

と、斎藤は笑顔で言った。

「そうだね」

と、海上は曖昧に頷いた。

海上は、斎藤という男がどちらかというと好きではなかった。これは海上の偏見かもしれないのだが、斎藤という男はだいたい自分の話しかしないし、ピザヤでアルバイトをしているときも自分のことは棚にあげて、バイト仲間の気に入らない人間のことを必要以上に悪く言つ傾向があつた。

また自分がミスをしたときには反省せずに、すぐに他人のせいにする。だから、海上はピザヤのアルバイトを辞めてから斎藤とは全く連絡を取つていなかつた。

「なにしてんの？」

と、斎藤は自分が嫌われていることなど全く気がつかない様子で
気安い口調で話しかけてきた。

「いや、今日バイト休みだから、フリフリしているんだけど」
海上がそう答えると、

「お前、まだバイトやつてんだ」

と、斎藤はバカにしたように半分笑つて言った。

「じゃあ、なに？まだ音楽やつてんだ？」

海上が苛立ちを押さえて我慢強く頷くと、斎藤は口元にこいつこ
た微笑を浮かべて、
「自由でいいねえ」

と、見下したように呟つた。

「まあね」

と、海上は答えると、

「斎藤は今なにやつてんの？」

と、訊ねてみた。斎藤は海上と一緒にアルバイトをしていたときは、海上と同じようにバンドをやつていた。一度どつしてもと誘わ
れて斎藤の組んでいるバンドのライブを見に行つたことがあるが、
砂糖菓子のように甘いラブソングのろくでもない音楽だったことが
印象に残つてゐる。

「俺？俺は見てごらんの通り、立派な社会人よ。カメラの営業やつ
てんだけさ、どうせ営業なんてやつてもやらなくてあんま変わら
ないからこいつしてサボッてんの」

斎藤はそう言つと、何が可笑しいのか愉快そうに笑つた。

それから海上は斎藤に誘われて近くにあるドトール「コーヒー」に行つた。ほんとうは斎藤と一緒にお茶なんてしたくなかったのだが、断るのも面倒だったのだ。

斎藤は社会人だからと言つて、海上が断つても無理に海上のぶんの「コーヒー」代も払ってくれた。

海上と斎藤は奥のテーブル席に向かい合わせに腰を下ろした。

「斎藤はじゃあもう音楽辞めちゃったんだ？」

「ど、海上は特にどうしても知りたいというわけでもなかつたのだが、話すことも思いつかなかつたのでなんとなく訊ねてみた。

すると、斎藤は「コーヒー」を口元に運びながら頷いた。

「わ、あんなの特に辞めちゃつたよ」

と、斎藤はバカバカしいといつたように微笑しながら答えた。

「こつまでも青春先延ばししてらんねえしれ」「ふう」と

と、海上は斎藤の言葉に頷いた。それから、

「こつ辞めたの？」

と、これもまた特にどうしても知りたいというわけでもなかつたのだが、つい反射的に尋ねてしまつた。

「さあ」

と、斎藤は海上の言葉に軽く首を傾げると、

「お前がピザや辞めてから一年くらいしてからだから、二、四年前じゃねえの」

と、どうでも良さそうに答えた。それから、斎藤は「コーヒー」カップをもとのソーサーのうえに戻すと、ポケットからタバコを取り出して口にくわえて火をつけた。そして口から上手そうに煙を吐き出

しながら、

「海上もそろそろ将来のこと真剣に考えた方がいいんじゃねえの？」
と、諭すよつて言つた。

「お前、俺とタメだからもう一十七だらっむつすぐ三十だぜ、どいつ
すんだよ。三十過ぎてから雇つてくれるような会社なんてそりやつ
見つからないぜ」

海上は齊藤の言葉にそんなことはわかつていて答えた。すると、
齊藤は失笑するよつて小さく笑つて、いやわかつてないねと続けて
言つた。

「お前は甘えてるんだよ」
と、齊藤は言つた。

「いつまで叶わない夢にしがみついてるんだよ。もつと現実を見ろ
よ。二十七にもなつてデビューできてないってことは才能なんてな
かつたつてことなんだよ。それくらい自分でわかるだろ？辛いかも
しれないけど、ちゃんと現実を見ろよ。もつと大人になれつて」

海上はどうして自分がこんな男に説教されなきゃいけないんだと
腹が立つたが、しかし、齊藤の言つていることはこちいちもつとも
だつたので返す言葉が見つからなかつた。確かに自分は甘えている
し、叶わない夢にしがみついているだけなのかもしれない。もつと
大人になるべきなのかもしれない。

海上は齊藤の言葉にそつかしもれないな、と、答えた。

齊藤は海上を言い負かしたと思つて満足したのか、今度はいたわ
るように微笑すると、

「お前も、就職しろよ」

と、優しい口調で言った。

「社会人だつて悪くねえって。そりゃあ、義務とか目標とか色々面倒くせえこともあるけどさ、毎月決まった額の給料もらえるし、ボーナスだつてあるんだぜ。好きなもの買えるよ。俺も就職してみてはじめてわかつたんだけどさ、どうじて俺はあんなに苦労してまで叶わない夢にしがみついてたんだろうって思つよ。お前も就職すれば楽になれるよ。な

齊藤はそれだけ言うと、腕時計に視線を走らせ、それまで座つていた椅子から立ち上がつた。コーヒーにはまだ半分も手をつけていない。

「じゃあ、そろそろ、俺、会社に戻らないといけない時間だからいくわ

齊藤は申し訳なさそうと言つた。海上にしてみれば願つたり叶つたりだつたのだが、そんなことは口に出して言えるはずもない。

「コーヒーは適当に片付けておいてよ」

齊藤はテーブルの上のコーヒーを顎で示してから言つた。
海上は黙つて頷いた。

それから齊藤はへらへらバカにしたような微笑を浮かべながらじやあなど言つと、海上に背を向けて歩いていこうとした。が、何かを思い出したのか、急に立ち止まって海上の方を振り返ると、胸ポケットに手を伸ばして財布を取り出すと、なかから一枚の紙を取り出して、それを海上に手渡した。

海上が手渡された一枚の紙片を見ていると、

「それ、俺の名刺。なんかあつたら連絡してくれよ」と、齊藤は言った。

「俺、社長と結構仲いいし、お前のこと紹介してあげられるかもよ

斎藤は微笑んで言った。そしてそれだけ言つと、また改めてじやあなど言い、背中を向けて歩いていった。

海上は斎藤の姿が見えなくなつてしまつて、もひつた名刺をすぐ
に破いて捨てた。

第五話

直美と口論になってしまったのは、海上がアパートに帰宅したその日の夜だった。

切つ掛は些細なことだった。

海上がフローリングの床の上に出しあなにしておいたCDを、直美が誤って踏んで割ってしまったのだ。

直美は海上に謝罪すると、必ず明日新しいものを買って返すからとまで言ってくれた。

いつもの海上であればそれくらいことで怒ったりはしなかった。多少とムッとしたりはしたかもしないが、それくらいのことで真剣に腹を立てることはまずなかつた。それに、もともとわかりづらい場所にCDを放置しておいた海上も悪かつたのだ。

でも、その日は斎藤のこともありて、海上は機嫌が悪かつた。つい感情的になつて、必要以上に直美のことを責めてしまつた。

気がついたときには口論になつていた。

物別れが決定的になつてしまつたのは、直美が口にした科白だつた。

直美が海上に対して、あなたの音楽のせい自分で自分がどれだけ辛い思いをし、なおかつ色んなことを我慢しているかと難詰したのだ。いつもでもくだらない音楽なんてやっていないで就職したらどうな

んだ、と。

齊藤のこともあって、就職といつ言葉に過敏になっていた海上は、激昂して、そんなふうに思つたのであれば俺と別れねばいいだろうと怒鳴つてしまつた。怒鳴つてしまつてから、海上は少し言いすぎたかな、と、反省したのだが、そのときには既に遅かつた。

怒つた直美は無表情にわかつたとだけ言つと、着ていた服のうえから「コートだけはあると、鞄を持って、家から出て行つてしまつた。海上も今更ひくにひけなくなつてしまい、家から出て行く直美をそのままにしてしまつた。テレビをつけると、見たくもないテレビ番組を黙つて眺めていた。

海上がいくら冷静さを取り戻したのは、直美が出て行つてしまつてから一時間以上が経過してからだつた。海上はついつきまでそこに直美のコートがかかっていたはずのハンガーを見つめながら、これまでにも何度も喧嘩はしてきたけれど、今回はもうダメかもしれないな、と、妙に冷静な気持ちで思つた。

でも、むしろ、これで良かつたのかもしれない、と、海上は自分自身に言つて聞かせるよつに思つた。自分にとつても、直美にとつても。

直美が部屋を出て行いくときにはちゃんとドアをしめていかなかつたらしく、ドアから隙間風が入つてきて寒かつたので、海上はフローリングの床のうえから立ち上がる歩いていつて部屋のドアを閉めた。

部屋のドアを閉めると、ガチャンと思つたよりも大きな音が部屋に響いた。そしてドアを閉めた瞬間に、海上はもう後戻りすることができないくらいに何かが決定的に、酷く、損なわれてしまつたことを悟つた。

三日経つても直美は戻つてこなかつた。今まであればどんなに派手な喧嘩をしてもいつも大抵一日目には戻つてきていた。

これはいよいよもうほんとうに駄目かもしれないな、と、海上は覚悟した。お互いのためにも別れ方がいいのかもしれないと思いつながらも、やはり海上は直美に対して未練の気持ちがあつたし、できることなら別れたくはなかつた。

でも、意地もあつて、海上の方から直美に連絡を取ることにはしなかつた。

このまま連絡を取らないことで彼女と別れることになつてしまふのであれば、それはそれで仕方がないのかもしれない、と、海上は自分自身に言い聞かせた。

喧嘩してから四日目の日、海上はその日、バイトも何も予定のない日だったので、いつ直美が戻つてもいいようにと一晩部屋で待機していることにした。

柄にもなく、部屋の掃除をしてみたりもした。

しかし、朝が過ぎ、昼が過ぎ、夕方が過ぎようとしても、直美が戻つてくる気配はなかつた。

海上がもうだめだな、と、諦めかけた頃、唐突にケータイ電話の着信音が鳴つた。

もしかして直美からの電話かと思い、慌てて海上が電話に出ると、それは直美からの電話ではなく、母親からの電話だつた。

「どうしたの？」

と、海上が電話に出ると、母親は緊迫した口調で、落ち着いて聞きなさいよ、と、諭すように言つた。

母親の科白に、海上が思わず警戒すると、母親は、

「今朝、柏原くんが亡くなつたつて」

と、唐突に言つた。

あまりのことに、海上が言葉を失つていると、母親は続けて言つた。

「さつき、柏原くんのお母さんから連絡があつたの」

と、母親は言つた。

海上は黙つていた。何をどう言つたらいいのかわからなかつたのだ。

「ちよつと聞いてるの？」

と、海上が黙つていると、母親は苛立つたように言つた。
聞いてるよ、と、海上は答えた。

「今日がおつやで、明日がお葬式だから、明日、朝、いつかに帰つてきなさいね」

と、母親は言つた。

海上の実家があるのは千葉だ。

海上はわかつたと答えて電話を切つた。

思考が麻痺してしまったように何も考えられなくなつた。

柏原祐樹は海上の小学校のときからの幼馴染だ。家が近所だったといふこともあって小さな頃はよくお互いの家を行き来して遊んだし、お互いの家の親が仲が良かつたこともあって、ときには泊りがけで遊んだりすることも珍しくなかつた。

柏原祐樹が病気になつたのは、小学校五年生のときだつた。そのとき海上は柏原と同じクラスだつたのだが、ある日を境に、突然柏原は学校にこなくなつてしまつた。

しばらくしてから学校の先生から説明があり、柏原が現在に脳に腫瘍ができるという難病にかかつていて病院に入院していることと、後日、その脳にできた腫瘍を取り除くための難しい手術が行われる予定だということが伝えられた。

柏原の手術が無事成功するようにとクラスのみんなで千羽鶴を作り、それを海上も含めたクラスの代表何人かで柏原の入院している病院まで届けにいった。

病院に行くと、柏原は脳にできた腫瘍のためかあまり自覚症状がないらしく、明るく、元気そうにしていた。まだ幼かつた海上はもしかすると柏原は仮病をつかってズル休みをしているだけなんじやなんかと疑わしく思つてしまつたほどだつた。

その日は早く元気になつてねといった励ましの言葉をかけて海上たちは病院をあとにした。

それから一週間後くらいに手術は行われ、手術はなんとか無事に成功した。しかし、脳にできた腫瘍を取り除く手術のため、柏原には少し障害が残った。

手術の終わった二週間後くらいに海上は両親と伴に柏原の入院している病院に見舞いに行つたのだが、そのとき、柏原は手術の後遺症のせいで全く言葉がしゃべれなくなってしまっていた。

海上が話しかけると、柏原は口を開けて何か喋ろうとするのだが、それがあーとかうーといった意味のない声にしかならない。

海上はそのときになつてはじめて、柏原という友人が重い病気になかかつてしまつたのだということを理解した。

柏原が学校に復学したのは、それから三ヶ月くらいが経過してからのことだった。

柏原はどうにか言葉が喋れるようになるまでは回復したみたいだった。

が、しかし、以前と全く同じというわけにはいかないようだつた。聞いているこちらがもどかしくなるような非常にゆっくりとした速度でしか柏原は言葉を話すことができなくなつてしまつた。それ加えて柏原は以前に比べて圧倒的に体力が低下した。

柏原は以前は運動場を走り回るような活発な子供だったのだが、病院から帰ってきてからは激しい運動ができなくなり、体育の時間のほとんどをみんなから離れた場所で見学するようになった。

海上は友人のあまりの変わりように驚いたし、ひょっとすると、柏原はこのまま死んでしまうんじゃないかと心配になつた。というのも、両親があの子はあまり長くは生きられないかも知れないと柏原のことを深刻な顔をして噂話をしているのを海上は偶然に耳にしてしまつたからだ。

海上は柏原が死んでしまうなんて冗談じやないと思つたし、柏原が一刻も早く、以前と同じように本格的に回復することを願わずにいられなかつた。

しかし、海上のそんな願いも虚しく、柏原の容態が本格的に回復することはなかつた。相変わらず柏原はゆっくりとした速度でしか言葉を話すことができなかつたし、以前のように運動することもできなかつた。それどころか、体調を崩しやすくなり、学校を休みがちになつた。

しかし、それでもどうにか柏原はなんとか無事小学校を卒業し、小学校を卒業すると、海上と同じ中学校に入学した。

中学校になると、柏原の事情をよく知らない人間が、柏原のことをばかにしたり、からかつたりするようになつた。柏原は手術の後遺症のせいでの変化をゆっくりとした速度でしか喋ることができなかつたのだが、誰かがわざとその柏原の喋り方を真似てみんなで笑つたりするのだ。

海上はそんな現場でくわすたびに柏原のことをかばつてやつたが、しかし、それにも限界があつた。海上の知らないところで柏原のことをバカにしたり、あざけつたりする人間があとを絶つことはなかつた。

もし、自分が柏原の立場だつたら辛いだろうな、と、海上は思つた。その頃海上は思春期特有の悩みなのか、生きることの意味や将来のことについて思い悩むことがよくあつた。

だから柏原の心境を思つと、いたたまれない気持ちになつた。なりたくない病気にかかり、言葉が不自由になり、以前のように思い通りに身体を動かすことができなくなつた。それがこのうえどうして同級生から不当にバカにされたり、からかわれたりしなければならないのだろう。

もし自分が柏原の立場だつたら、きっと死にたくなつたはずだと海上は思つた。きっとこの世界のありとあらゆることが憎くて憎くてしうがくなつただろうと思つた。しかし、それにも関わらず、不思議と柏原がふざきこんだり、暗くなつたりすることはなかつた。海上が話しかけると、柏原は明るい微笑を浮かべてゆっくりとながらも楽しそうに話をし、ときには冗談を言つたりもした。

海上は一度だけ、柏原と生きることの意味について話をしたことがある。確か中間テストか何かの関係で学校が早く終わり、途中まで一緒に歩いて帰つたときのことだ。

海上が柏原に生きていて辛くなつたり、死にたくなつたりすることはないのかと尋ねると、柏原は穏やかに笑つてそんなことはないと答えた。

海上はその当時バスケットボール部に入つていたのだが、どれだけ一生懸命練習しても、なかなかレギュラーになれず、一方でろくすっぽ練習にもでこないような部員があつさりとレギュラーにな

れてしまつたりすることがあつた。やつこつとも、海上は理不尽なものを感じずにはいられなかつた。

また勉強に關してもそつこいつを感じる「こと」がしばしばあつた。海上がどんなに頑張つて勉強しても、大して勉強もしていない人間にあつたとり負けてしまつことがある。

結局、全てのことは、そのひとがもともと持つてゐる素質や才能によつて大きく左右されてしまつ。努力が報われることは少ないし、願いは叶わない。この世界はなんて理不尽にできているのだらうと海上はよく思つた。

海上がそつと言つと、でも、そつと言つた、ときにも虚しかつたり、厳しかつたりする人生のなかで、色々なことを感じて、考えて学んでいくことに、きっと生きる意味はあるのだろうと想つと柏原は答えた。

人生とはたぶん何かを学ぶためにあるのであつて、何かを勝ち得たり、結果を出すためにあるのではないと思つ、と。だから、たとえ苦しくてもその苦しみのなかで必死にもがいて、自分にできることを精一杯やればそれで十分なのだ、と。

もちろん、柏原が理論整然とそんなふうに語つたわけではないのだが、要約すると、柏原が海上に話したことばだいたいそのような意味になつた。

そのときの海上には柏原の語つたことは高尚過ぎて全てことをそのまま額縁通りに受け入れることはできなかつた。やはり海上にしてみれば結果が出せなければ全ては無駄のように思えてしまつし、

人生とは幸福になるためにあるのだという考え方があった。しかし、それでも、なるほどな、と考えさせられる部分はあった。

少なくとも柏原の語った、人生とは自分にできることを精一杯やればそれで十分なのだという考え方には、救われるものがあった。結果がだせなくとも、幸せでなくとも、それでもそこには救いがあるのだ、と。

その当時、まだ十四歳か十五歳に過ぎなかつたのに、柏原は変に老成してしまつてゐるところがあつた。たぶん幼い頃に重い病気をし、ひとよりも何倍も辛い思いしたことが、柏原の心を普通のひとの何倍も早い速度で成長させたのだろうと海上は今になつて思つ。

その後、海上は中学校を卒業すると、地元の進学校に進学し、柏原は学力や言葉の問題もあつて、職業訓練学校のよつなどころに進学した。

しかし、柏原はその職業訓練学校に進学してから間もなく体調を崩しやすくなり、頻繁に病院の入退院を繰り返すよつになつた。

そして海上が高校を卒業する頃くらいには、柏原はほとんどの時間病院で過ごすよつになつてしまつた。

第七話

柏原はその頃にしては珍しく体調が良く、病院を一時退院して実家に帰つてきていた。

柏原が実家に帰つてきているという話を聞いた海上は、久しぶりに柏原の家を訪ねていった。柏原の実家を訪ねていったのは、柏原にちょっと報告しておきたいことがあったからだ。

海上は高校を卒業したあと、地元にある私立の大学に進学したのだが、どうしてもそこで生活に馴染むことができずにいた。そこで学ぶ全てのことが無駄なことのように思えてしまって仕方がなかった。

それにその頃、海上は高校のときに友達に誘われてはじめたバンドのめいつこむよつになつていて、このまま大学でやりたくもない勉強を続けるよりは、大学を辞めて本格的にプロのミュージシャンを目指したいという気持ちが抑えきれなくなつてきていた。

そして海上は大学一年の夏、思い切つて大学を辞めると、東京に出て、そこでプロのミュージシャンを目指す決意を固めた。

海上はそのことを柏原に報告しようと思つて、その日、実に五年ぶりくらいに柏原の家を訪ねていったのだった。

海上が柏原の家を訪ねていくと、柏原だけでなく、柏原の両親も久しぶりに訪ねて来た海上のことを歓迎してくれた。海上がちょっと

と寄つただけだからと断つても、海上のために手料理を振舞つてくれ、せつかくだから泊まつていけとまで言つてくれた。

海上としては自分が東京に行くことにしただけを報告して帰るつもりだったのだが、結局、帰りにくくなつてしまい、その日は柏原の家に泊まることになつてしまつた。まあ、こつして柏原とゆつくり話をする機会もこれからさきそつ滅多にないだらうし、まあいいかと海上も思い直した。

その日の夜は、いつか子供の頃に泊まりにきたときもそうしたよう、柏原と一緒にテレビゲームをやつたり、漫画を読んだりして時間を過ごした。

そしてだいぶ夜も更けてくると、柏原はちょっと眠くなつてきたと言つて、布団のうえに横になつた。

海上も柏原のお母さんが用意してくれた布団のうえに横になつた。

部屋の電気を消すと、部屋のなかは真っ暗になつた。しばらくして目が暗闇に慣れてくると、青白い月明かりの光が静かに部屋を照らしているのがわかつた。どこか不自然な感じがするほど、その日は月の光の明るい夜だつた。

海上が布団の上から起きだして部屋のカーテンを開けてみると、そこには淡く透き通つた、きれいな黄色い光を放つ満月が見えていた。

実は自分は幼い頃、月の見える夜が怖かつたのだ、と、静かな口調で柏原が語りはじめたのは、部屋のなかが静まり返つて、柏原が

もう眠ってしまったのかと海上が思つたときのことだった。

まだ起きてたんだ、と、海上が意外に思つて言つと、せつかく友達が遊びにきてくれていろいろのままで眠つてしまつのはもつたいなくて、と、柏原は笑つて答えた。

そつか、と、海上は柏原の科白に微笑して頷くと、それから柏原に話の続きを促した。なんで月の夜が子供の頃は怖かつたのか、と。すると、柏原は苦笑するように笑つて、それは子供の頃に見たテレビ番組のせいなのだ、と、話はじめた。

月の光を見た人間が狼男に変身しまつという映画かドラマを昔テレビで見ていて、その番組を見て以来、ひょつとすると、自分も月の光を見ると狼男に変身してしまうんじゃないかと恐ろしくなつてしまつたのだ、と、柏原は話した。

海上が柏原の奇妙な告白に可笑しくなつて笑い声を上げると、つられるようにして柏原も少し笑つて、でも、実際に、狼男にこそならなかつたけど、ある日の夜、月の光を見ていたら急に頭がわれるようになつて、そのあと自分がいまの病気にかかつてしまつたのだ、と、柏原は語つた。

海上が柏原の話にどう答えていいのかわからずに曖昧に相槌を打つと、柏原はわずかなあいだ黙つていてから、やがて、自分はもうあと何年も生きられないだらうと思うとポツリと言つた。

海上がそんなこと言つなよと言つと、柏原は力なく小さく笑つて、でも、ほんとに自分の死期が近づいているのがただわかるのだと柏原は言つた。

海上はそんな柏原の科白に對して、そんなことはない、実際に体調だつてよくなつてきているし、現に退院だつてしているじゃないか、と言つた。

すると、柏原はたぶんこれは单なる一時的なものだと黙つと言つた。しばらくしたらまた悪くなると思つし、今度はもうとすぐ悪くなる予感がする、と。

なんでそんなこと言つんだよ、と、海上はちょっと苛立つて言つた。どうしてそんなふうにネガティブに考えるんだよ、と、海上は友人を責めた。昔は病氣で辛くてもそんなことは言わなかつたじゃないか、と。

海上の言葉に、柏原は自分はべつにネガティブになつているわけじゃない、と、答えた。ただ事實をそのまま伝えていいだけだ、と言つた。自分はべつに生きる氣力を失つていいわけじゃないし、投げやりな気持ちになつていいわけでもないと柏原は言つた。

ただ、自分はほんとにいつ死んでしまつてもおかしくない状態だから、そのまえにきちんと海上にお礼が言つておきたいのだ、と、柏原は語つた。

中学生のとき、自分がクラスの人間にいじめられているときにかばつてくれて感謝していると柏原は告げた。中学を卒業してからも入院している自分をときどき訪ねてくれて嬉しかつたと照れ臭そうに柏原は言つた。

海上はそんな柏原の科白に黙つて耳を傾けていた。

最後、柏原は東京にいっても頑張れよと言った。俺はお前が東京で成功することを祈っているし、俺はこっちで生きるために頑張るから、と。

それから柏原はふと窓の方に視線を向けると、でも、今日はほんとに月がきれいだなどどこか哀しそうな瞳で月を見つめて言った。

そのあと海上と柏原は布団のうえに横になりながら思い出話のようなことを少し話した。しばらくして柏原の声が聞こえなくなつたなと思って海上が柏原の方を振り返つてみると、柏原いつの間に眠つてしまつていた。

第八話

柏原の死に顔は、その日の夜と同じように静かで清らかだった。まるでぐつすりと熟睡しているうちに死んでしまったという感じだつた。

海上は棺桶に入れられた柏原の顔を見てはじめて、柏原がもう死んでしまったのだということが理解できた。そのときになつてやつとはじめて友人を失つてしまつたのだという激しい喪失感がこみ上げてきた。

気がつくと、海上は自分でも知らないうちに涙を零してしまつていた。

母親から電話があつた次の日の朝、海上は一着しか持つていないスースイを着て実家のある千葉に帰つた。そしてそのまま海上は柏原の葬式が行われている柏原の実家に向かつた。

海上が柏原の実家を訪ねていくと、柏原のお母さんはわざわざ遠いところを訪ねてきてくれてありがとうと感謝の言葉を述べた。そして柏原のお母さんは、柏原が最後、ほとんど苦しむこともなく他界したことを海上に教えてくれた。

柏原はあの月夜の夜、自分でも予言した通り、海上が東京にいつ間もなくまた体調を崩した。それまでは病院と実家を行ったりきたりする生活を送っていたのだが、その日を境に、もう、柏原が実家に戻ることはなかつた。

海上は東京に行ってからもだいたい三ヶ月に一度くらいは地元の千葉に戻り、友人の入院している病院を訪ねていった。

海上が病院を訪ねていくと、柏原は自分が病気で苦しいはまなのに、色々と海上のことを気遣つてくれた。東京で元氣でやつているか、とか、上手くいかないことがあつても頑張れよ、と。

海上は自分が励まなさなければならない立場にあるのに、いつも逆に柏原の言葉に勇気付けられたりすることになった。

柏原の様態が本格的に悪化したのは、柏原が二十五歳のときだった。

眠っていた柏原は突然苦しみ出すと、そのまま意識を失い、一週間ちかくのあいだを生死彷徨うことになった。

どうにか一命は取り留めたものの、その後、柏原は定期的に発作を起こして意識を失うようになった。回復したと思っても、またすぐには悪化した。

海上が一番最後に帰省した十月のときも、柏原は例によつて意識不明の重体から回復したばかりだった。身体中にいくつもの管を通して苦しそうに横になつてゐる柏原は側で見ていて痛々しいくらいだった。

しかし、それでも柏原はいつもの明るさを失わず、海上が心配して声をかけると、柏原は大丈夫だと笑つて答え、それよりお前の方は大丈夫なのかと逆に海上のことを案じてくれさえした。頑張つて音楽は続いているのか、と。

その後、柏原は小康状態が続いていて比較的に体調も良さそうにしていたらしいのだが、つい先日、眠っているときにまた発作がはじまり、そのまま意識を失った柏原はもう一度と田を覚ますことはなかつたらしい。

海上は柏原のお母さんからそんな報告を受けながら、せめて最後、柏原が死んでしまうとき、どうして自分は柏原の側についていてあげられなかつたのだろうと悔しかつた。自分はあれほど柏原から励まされたり、勇気付けられたりしたといふのに。

海上がそう言つと、柏原のお母さんは悲壮な笑みを浮かべて、そんなことは気にしなくていいと言つた。あの子は定期的にあなたが訪ねてきてくれることをとても喜んでいたし、それだけで十分だと、柏原のお母さんは語つた。

それにあの子はもうそろそろ楽になつても良い頃だつたと想つの、と柏原のお母さんは続けて言つた。あの子はもう十分すぎるほど苦しんだし、もう十分すぎるほど生きるために頑張つたと思つゝと。あの子を褒めてあげたいと思う、と、柏原のお母さんは涙を堪えて静かに微笑んで言つた。

柏原の亡骸は靈柩車に乗せられて火葬場に行き、そこで灰になつた。

火葬場まで一緒についていった海上は柏原の遺骨を見せてもらつたのだが、それはとても白くて、とても穏やかで、まるで柏原の精神そのもののように海上には思えた。

柏原の葬式があつたその日の夜は海上は実家に泊まり、翌朝になつてひとりでまた東京に戻つた。

帰りの電車のなかで海上はずつと柏原のことを考え続けた。柏原と話したことや、柏原が教えてくれたこと。

天気はよく晴れていってきれいな青空が電車の窓の外には見えている。窓から差し込んでくる冬の澄んだ穏やかな光を浴びていると、柏原が死んでしまったなんてとても信じられないような気持ちになつてくる。ついさっきまで自分は眠っていてそれで悪い夢でも見ていたんじゃないのか、と。

だけど、でも、間違いなく、柏原は死んでしまったのだった。

東京のアパートに帰つたのはもう毎週だった。

海上がアパートに向かつて歩いていくと、自分の部屋のドアの前で誰かが蹲つているのが見えてきた。誰だらつとも思つてよく見てみると、それは直美だつた。

直美は海上が歩いてくるのに気がつくと、蹲つていた態勢から立ち上がり、微笑んで海上の顔を見つめた。

こんなところでなにやつてゐる、と、海上が不思議に思つて尋ねると、直美は苦笑して、家をでていくときに合鍵を持つていくのを忘れちやつたのよ、と、いいわけするよつと答えた。

ほんとうは海上のケータイに電話じみつけとも思つたのだが、なんとなく、このままずっと海上が帰つてくるのを待つてじよつと思つたのだ、と、直美は話した。

どう答えたらいここのかわからなかつたので、そつか、と、海上は曖昧に頷いた。

少しの沈黙があつて、それから直美は口を開くと、この前は「めん」と、小さな声で謝つた。

「あなたの音楽のことを悪く言つてしまつたはなかつたの。でも、ちよつとあのときはカアつて頭に血が上つちやつて」

そんなことだつたら気にしなくていい、と、海上は笑つて答えた。俺もたかがCD一枚くらいでムキになつたりして悪かつた、と、海

海上が直美に謝罪した。

海上がそう言つと、直美は何も言わずに微笑んで、それから海上に黄色の袋にはいったものを手渡した。なんだろうと思つて海上が見てみると、

「それ、わたしがこの前割っちゃったCD。ちゃんと弁償したからね。それからおまけのCDもつけといた」

直美はそう言つと、少し笑つた。

べつに弁償なんてしなくて良かつたのにと笑いながら、海上は渡された袋を受け取つた。

海上が柏原の死について話したのは、部屋に入つて少し経つてからだつた。

海上は直美がいれてくれたインスタントのコーヒーを啜りながら、実は昨日、自分は幼馴染のお葬式にいつていたのだ、と、話した。

すると、直美は海上の顔をじつと見つめた。海上のあまりにも突然な告白に声を失つてしまつていてるようだつた。

それから、海上は直美に柏原のことについて話して聞かせた。柏原がまだ幼い頃に重い病気にかかってしまったこと。それでも明るさを失わずにこれまで懸命に生きてきたこと。

海上が話し終えると、直美は「そつか」と頷いただけで何も言わなかつた。黙つて柏原の死について何か考えている様子だつた。

海上はしばらぐのあいだ黙つていてから、でも、俺は柏原のこととかわいそとか、そんなふうには思いたくないんだ、と、言った。

「そう言つと、直美は俯けていた顔をあげて、不思議そつに海上の顔を見つめた。

「確かにまだ二十七歳とかそんな若さで死んでしまった柏原はかわいそりかもしないけど、でも、俺はあいつはあいつりになりもう一生懸命に頑張つたつて思うんだ」

「と、海上は言った。

だから、俺は柏原は病氣に負けてしまったわけじゃないと思ったいのだと、海上は続けて言った。柏原は自分にできることを精一杯やつて、それで彼なりに何かをやりと遂げて死んでいったのだと思いたいのだと海上は直美に話した。

すると、直美はしばらぐのあいだ海上の言ったことについて考えるように黙つていてから、やがて、「そうね」と、少し寂しそうに微笑んで頷いた。

今、海上は井の頭公園のベンチにギターを持つて座っている。冬の冷たい風が吹いていて、かなり肌寒い。

今日は月に一度の恒例の飲み会があつた日だった。今はその飲み会が終わって、始発電車を待つために例によつていつも公園でみんなで時間を潰しているところだ。

海上は飲み会に行くときギターを持参していった。みんなはどう

して海上がギターを持っているのかと不思議がつたが、実はこのあとみんなに新曲を聞いてもらいたいと思っているのだと告げるのは恥ずかしかったので、ついでに今までスタジオで練習していたからと咄嗟に嘘をついた。

海上はみんなと一緒に飲み屋から公園に移動したあと、ベンチに腰を下ろすと、たりげなくギターケースのなかからギターを取り出すと手に持った。

寒さで手がかじかんでしまってちやんと演奏できるかいまひとつ自信がなかつたが、それでもせつかくの機会なので無理でも弾いてみようと思つた。

「何か弾くんですか？」

と、海上がギターの調弦をやつていると、山本ゆかりが興味をひかれたように微笑みながら尋ねてきた。

海上はゆかりの間に曖昧に微笑してちょっとねと答えると、「はい、みんな集合」

と、照れ隠しのためにおどけた口調で言つた。

海上のかけた号令に、思い思いの場所にちらばつていたみんながどうしたのだろうと集まってくる。

「なにか弾くの？」

と、東海林良美がコートのポケットに手を突っ込んでゆかりがしたのと同じ質問をした。

「もしかして弾きがたりとかしてくれるんですか？」

と、良美のとなりにいた松田祥子が明るい声で言つた。

海上はふたりの問には何も答えずに、みんなそこに並んで、と、

言つた。みんなこれから何がはじまるのだからと皿葉をやめやめながら海上に指示されたとおりに並んだ。

海上はわざともつたいぶつて間をあけないと、

「えー、じゃあ、今日これから新曲を発表したいと思います」

と、海上は宣言した。

海上のコメントにみんな弾んだ声を出したり、笑つたりした。

「楽しみーー！」

と、酔つ払つた中平が近所迷惑になるような大声を出した。

「ちょっとそこ静かにして」

と、海上は笑つて中平を注意すると、

「えーと、今年ももう少しで終わりだし、来年、みんながいい年を迎えるれるようになるとと思つて、この日のためにちょっと新曲なんかを作つてみたりしました。良かつたらきてやってください」

今日は十一月三十日で、あともう一日で今年も終わりだ。来年はどんな年になるのだろうと海上は思つ。

「前置きはいいから早くーー！」

と、酔つ払つた中平がまた大声を出した。

海上は苦笑すると、改めてギターを待ちなおし、ギターの弦を指で押さえた。高校のとき生まれてはじめて体育館のステージで歌つたときみたいにすゞく緊張する。海上は大きく息を吸つて、吐き出した。吐き出した息は、寒気のせいで吐き出した息の形に凍りつく。

海上はみんなの顔を一瞥すると、ちょっと躊躇つてから歌いはじめた。

今回の新曲は、いつも激しい曲調とは違つて、静かめの曲になつた。少し哀しくて、だけど、優しい歌。たとえば祈りや願いのよ

うな。それそのものでは直接誰かを救うこと、何かを変えることもできないけれど、でも、その歌を聴いたひとの心を暖め、希望へと誘うことができる歌。果たして作者の意図通りにこの曲が聞く人に届くかどうかはわからなかつたけれど、それでも可能な限り、海上は心を込めて丁寧に歌つた。

海上がこの曲を完成させたのは、柏原の葬式から東京に戻つてきただその日の夜だった。その日、海上は眠りうと思つたのだが、なかなか寝付くことができず、諦めた海上は新曲作りに挑戦してみることにした。すると、自分でも思いがけず、柏原が曲作りを手伝ってくれたかのように比較的簡単に新しい曲を作ることができた。

海上は柏原がそうしたように、精一杯もがいてみようと決意した。最後まで、往生際悪く、自分が今一番やりたいと思っていることは音楽を作ることだ。だから、そのことを最後まで続けてみようと思った。たとえこのさき誰からも認められなくて、無駄な努力だとバカにされて、笑われたとしても。もっと歳をとつておじさんになつても音楽にしがみついて滑稽に生きてやろうと海上は開き直つた。

ギター一本あればホームレスになつたつて音楽を続けていくことはできるはずだ。実際にそんなふうに思い続けられるかどうかはわからないけど、少なくとも今は諦めることは間違つたことのようと思えた。

海上は希望は信じてみたいと強く思った。

曲が、もうすぐ終わらつとしている。ふと夜空に視線を向けてみると、夜空に片隅に月が浮かんでいるのが見えた。その月を見つめながら、海上は死んでしまった友達のことを思い、これから明日を思った。

曲が終わると、ギャラリーから暖かい拍手と喝采が起立った。海上は片手をあげて声援に答えると、

「みんな愛してる」

と、ふざけて言った。

海上の科白にみんなが可笑しそうに声をあげて笑った。

海上はもう一度友達の姿を探し求めよつて空を仰いだ。

夜空は冷たく透き通った青色に染まっている。まるで夜空の内側から新しい朝が透けて見えるかのようだ。そしてそんな朝の光と夜の暗闇が静かに溶け合つ空の端で、月は、物静かに、どこか微笑みかけるようにそっと光を放っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2669d/>

月夜の夜にきみが僕に話したこと

2011年4月5日21時55分発行